

漢墓に於ける副葬銅鏡と地域差に関する一考察（その1—1）

～洛陽焼溝漢墓及び広州漢墓の報告書より～

C050501 倉本 卿介

はじめに

1952年から1953年にかけて、河南省洛陽市の「洛陽焼溝漢墓」と呼ばれる墳墓群が発掘調査され、前漢中葉から後漢後期に亘る墳墓225墓中95墓から118面の銅鏡と9面（報告書の詳細では8面）の鉄鏡が出土している。〔洛陽焼溝漢墓〕報告書・〔註1〕

又、広東省広州市の「広州漢墓」からは1953年から1960年にかけての発掘調査により、秦・漢代から明代までの墳墓697墓の内、前漢から後漢後期に亘る409墓中132墓から157面の銅鏡が出土している。〔広州漢墓〕報告書・〔註2〕

其々報告書が刊行されているが、このレポートでは其々の地の歴史的環境を理解した上で、それらの報告書より墳墓群の実態を把握し、当時“鏡の持つ意味”を銅鏡副葬の有無墓の各種資料を比較する事により推察し得るか否か、又両地域の墓葬の相違を考察したい。

第一章 洛陽焼溝漢墓に関して

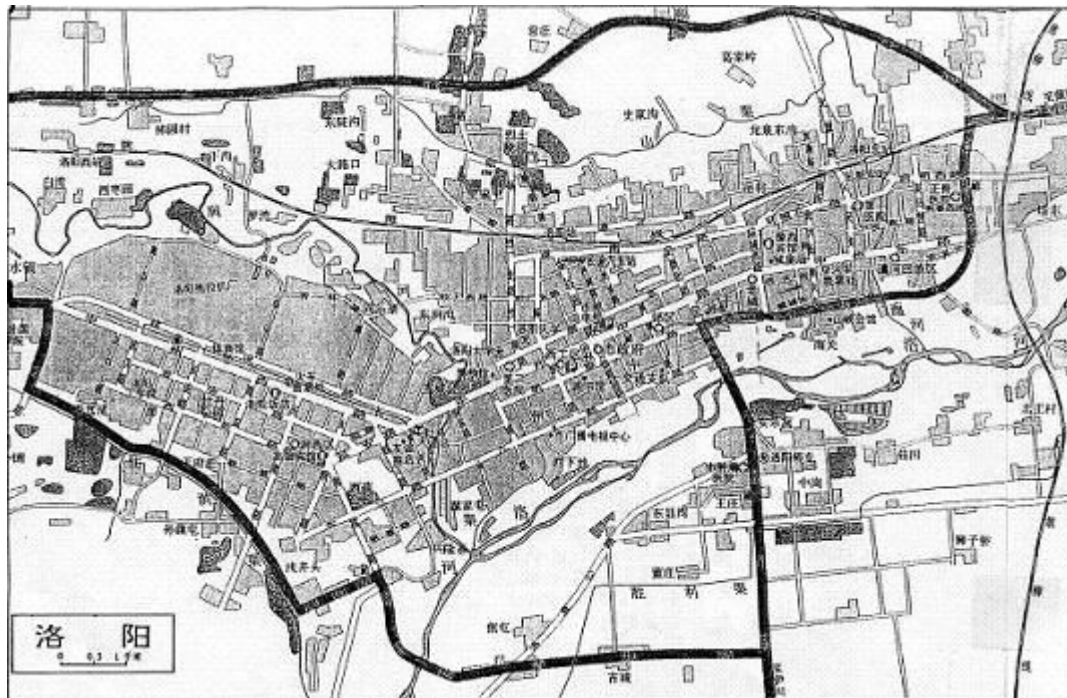
1、洛陽(雒陽)に関すること

洛陽とは洛河の北岸を意味する。歴代の王朝が王都あるいは陪都を設けた所である。

現在の洛陽市は中国七大古都の一つに指定され、1948年に市に定められた。

孟津等9県市を統括する、隴海線・焦柳線両鉄道が交差する河南省西部にある。

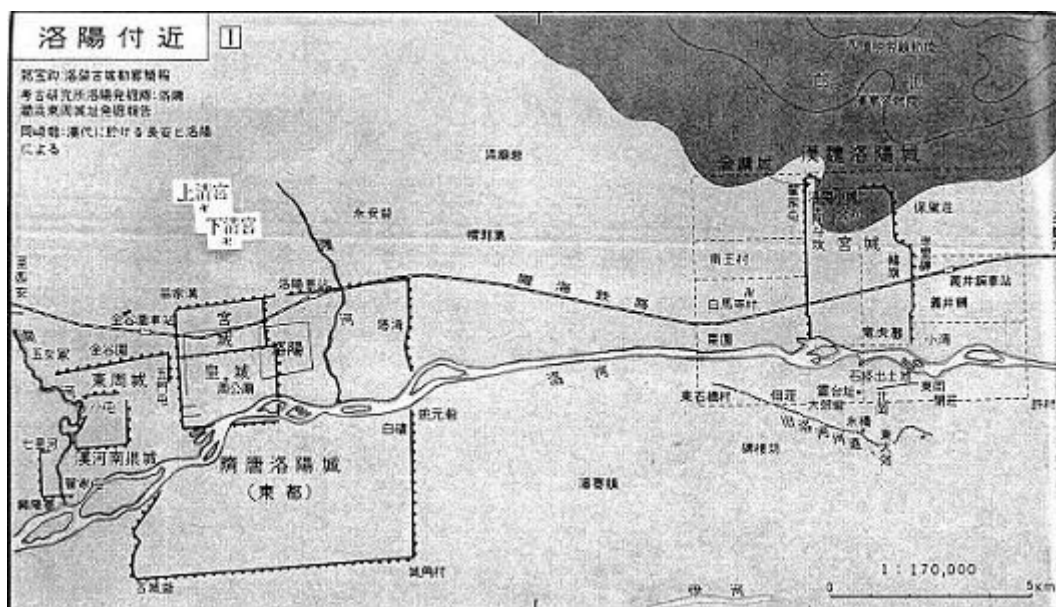
農業機械、鉦山機械の製造を主とする工業都市である。特産の牡丹は天下一。〔註7〕



1 図1 現在の洛陽市街図 中国地図冊より

北を黄河が流れているが、市と黄河の間には緩やかな邙山台地が東西に横たわり、黄河の水患から市を守ってきた。東は中岳嵩山を望んで鄭州市に、南は伏牛山脈を境に南陽地区に、西は三门峡市にそれぞれ接している。西に虎牢が関をなし、その間を伊河、洛河、瀧河（てんが）、澗河、金河の諸河がゆったりと流れ、中央は堆積盆地をなしている。気候は温暖で、土地は肥沃、物産も豊かで、「形勝は天下に甲」と言われ、東周・東漢・曹魏・西晋・北魏・隋・唐および五代の後梁・後唐がここに建都したことから、「九朝古都」と呼ばれる。黄河の対岸は河南省焦作市、その向こうは山西省である。

50～60 万年前からこの一帯で人類の活動が始まったことが知られている。7 千～4 千年前の新石器時代中期・晩期にはかなりの人口集中がみられ、生産も先進的な地域であったようだ。洛陽市区から偃師市にかけて、夏代と商代の帝王の都城址や文化遺跡が発見されている。この地が洛陽と呼ばれるようになったのは、文献で見るとは戦国時代の後半からで、『史記・蘇秦列伝』の中の洛陽の人“蘇秦”（～紀元前 371 年）の言で、「我をして、雒陽の負郭の田二頃あらしめば、吾豈に能く六国の相印を佩びんや」とある。[註 24] 市域内外には、「東周王城」、「漢魏洛陽故城」（全国重点文物保护单位）、「隋唐東城故城」（全国重点文物保护单位）、中国最初の官立の仏教寺院「白馬寺」（全国重点文物保护单位）、中国三大石窟のひとつ「龍門石窟」（全国重点文物保护单位）のほか、三国時代の英傑関羽の首塚「関林」、唐代の詩人白居易の「故居」とその墓「白園」、歴代の文物の精品を展示している「洛陽博物館」、歴代の古墓を移設し展示している「洛陽古墓博物館」などがある。[註 4] 「洛陽」は古くは「雒陽」「洛陽」の両者を併用したが、前漢末以来「雒陽」のみとなり、魏代になって再び「洛陽」と表記するようになった。



2 洛陽付近 各王朝古城址図 アジア歴史地図より（一部加筆）

● 西周時代
 雒邑（成周）

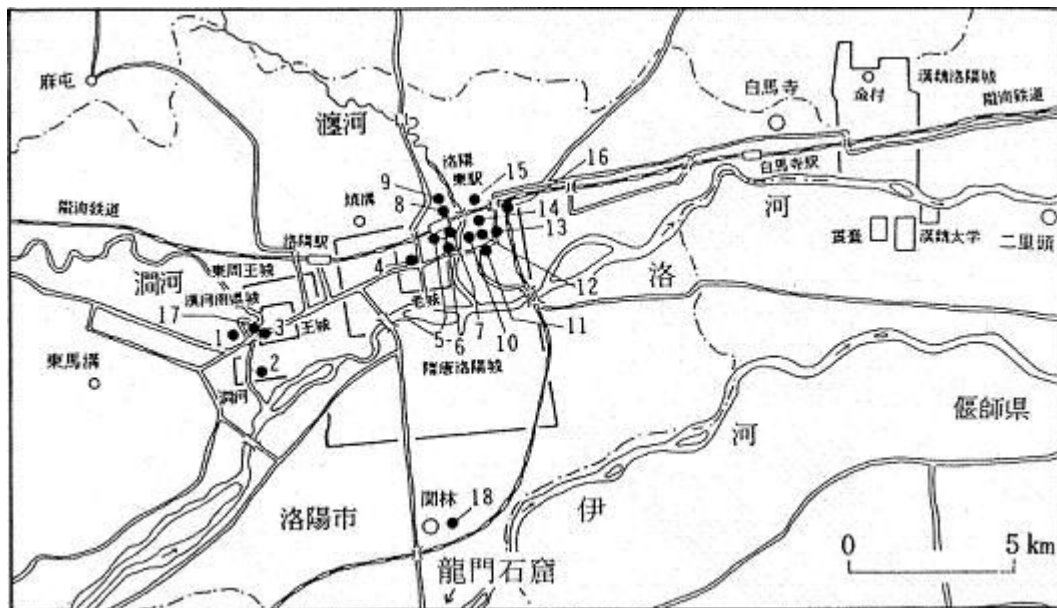


図3 洛陽付近の西周時代遺跡(5~7；龐家溝墓地 8；北窯村青銅器製作址) 中国の考古学より

紀元前 1046 年[註 3] (紀元前 1023 年との説あり[註 11])、関中平野の渭水のほとりにあった周の武王が、黄河中流域北岸にあった殷 (いまの安陽) の紂王を滅ぼして周王朝をたてたが、未だ強大な殷の残存勢力をそのままにして没し、幼少の成王を補佐した周公旦は、召公奭と共に東征し紀元前 1043 年それらを平定した。成王は召公奭に命じ東方地域を経営する戦略的拠点として、今の洛陽の地に雒邑(下都)を建設し周王朝の東都とした。これを「成周」と呼び、西の長安に近い都(豊京・鎬京)を「宗周」と呼んだ。

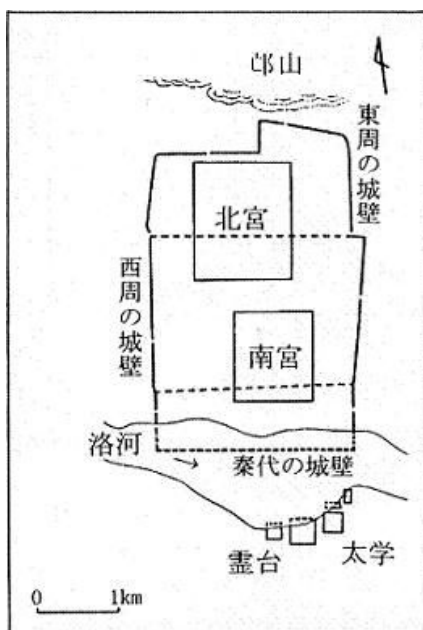
「宗周」は西周王朝の本拠であり、祖先を祭る宗廟をはじめ、王宮や貴族の居館があったが、「成周」にも王室の分廟や諸種の施設が作られ、必要に応じて王も「成周」に出かけていた。この地は古くからの聚落があったらしく、武王も牧野の戦いの帰途、ここに暫く逗留したと言われている。『史記』周本紀によると、武王は「周の都を雒邑に造営し、東都として西に帰った」とされ[註 16]、この雒邑は当時武王の行都(国都以外の地に臨時に設けられた都)であったらしい。[註 15]

成王の時のこの雒邑建設も、以前からあった城郭を補修拡大したものであり、この時には成周城と王城との二つが建設されたと伝えられている。

建設場所に関しては『尚書』洛誥編に記録されている。卜ったところ黄河の南にある西の澗河と東の瀍河に挟まれ、洛河に近いところ、また瀍河の東で洛河に近いところは吉とでたと言う[註 9]。このように周の雒邑には、「成周」と「王城」の2城が並行してあり、後の漢河南县城の位置にかつての王城が、漢魏洛陽城の位置にかつての成周があったという説

が、漢代以降長らく言われてきた。1950年代に、旧洛陽市街地西部の澗河東岸で、東周時代の大規模な城郭と、その内城の位置に造営された漢河南県城が発見されると、東周時代の城郭は「東周王城」と呼ばれた。しかし、東周王城の周辺では西周期に遡る文化堆積は希薄で、発見された「東周王城」がすなわち西周期時代の「王城」を継承したものと言う結論になっていない[註12]。今のところ、西周期時代に遡る城壁は発見されていない。

現在までの発掘成果からみると、西周期の大規模な墓地や青銅器製作址は、東周王城よりも5～6 km東の旧洛陽市街地の東部、澗河両岸に集中している(図3)。西周期時代の洛邑の中心部は、その一帯にあったと考えられる。西周期の金文や、西周甲骨には、「王城」の名は見えないが、「成周」の名は登場しており、「成周」は洛陽にあった周の都城の総称とも考えられる。洛陽地区では、これまでに800余基の西周期の墓が発掘されているが、中でも澗河両岸の邙山南麓に位置する龐家溝西周墓地では370基が発掘され、殆どは盗掘を受けていたが、青銅器を副葬した墓が少なくない。銘文には「太保」・「毛伯」・「豊伯」などの名がみられ、明らかに周王朝と近い関係にあった諸侯・臣下とその一族たちの墓地と考えられる。龐家溝西周墓地の南西には、別に平民の墓域とされるものもある。またこれら墓域の北の北窯村西では、面積20万㎡、文化層堆積が2m前後という大規模な青銅器製作址が発見されている。周王室に属する青銅器工房であったことは間違いないであろう。この青銅器製作工房址の範囲において殷文化の特徴をもつ「殷人墓」約300基が発見されていると言われている。また澗河からやや東に離れた一帯からも100基以上の「殷人墓」が発見されていると言う。青銅器製作に関し殷人が関与していたと考えられる[註12]。



「成周」は澗河東岸で発見された漢河南県城から東へ約17 km。今に残る白馬寺の東1.5 kmの、東西に連なる邙山の山並みから南に緩やかに下る斜面上に位置する。後漢の雒陽城は、西周城の上に建てられたと思われる。最初に築かれた西周時代の城壁は、平面形が東西約3 km、南北約2 kmのほぼ長方形で、その後、東周時代に西周城壁の北約1.5 km迄を囲む城壁が築かれている。(図4) この拡張部の東北隅が、1928年に多数の戦国時代の遺物を出土した金村古墓の所在地と伝えられている地点である。

さらに秦時代に西周城壁の南側に約1 km幅の範囲迄を囲む城壁が築かれている。

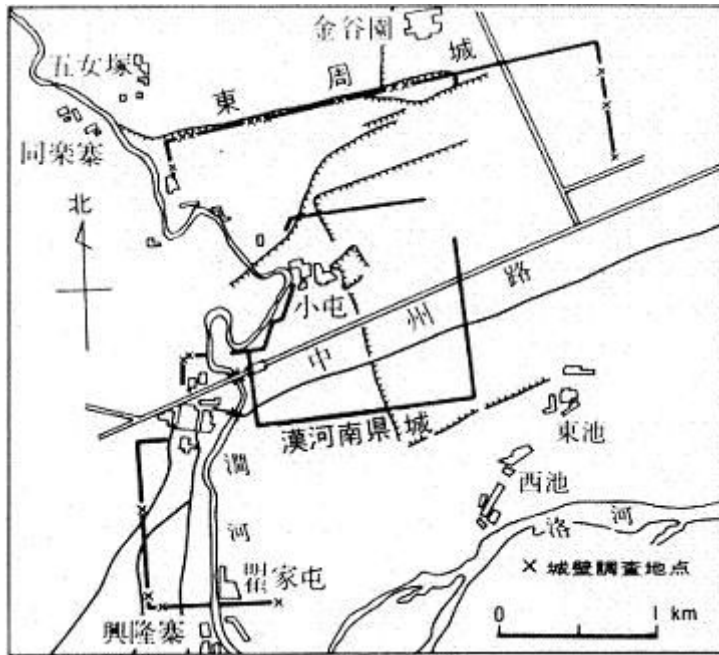
(図4中の太学・霊台等は後漢時代のものである)

図4 西周・東周時代の洛陽城

中国の考古学より

● 東周時代・王城

西周末、平王が洛陽の「王城」の地に遷都（紀元前 770 年）し、そのあとを東周時代（春秋・戦国時代）と言う。紀元前 256 年、赧（たん）王の時に西方の秦により滅ぼされる迄の 23 王 514 年間の内、紀元前 519 年敬王の時「成周」（下都）に遷都し、赧王が再び「王城」に戻るその間 10 世を除く、13 世・300 年間余は洛陽の「王城」に都があった。



王城の版築城壁は既に埋設していたが、全面的なボーリングと発掘によって明らかになったことは、王城の南は洛河に接し、西は澗河に跨り、不規則な方形を呈する。大体の城周の長さは約 15 km、北牆は 2890m で、その外に濠があり、東牆は約 1000m、西牆は 3700m、南牆は西の部分は残存しているが、東の部分は洛河によって削り取られている。2004 年の発掘で、東城壁の一部が発見された。

図 5 前漢河南県城と東周古城 中国の歴史より

「王城」には天子が常に住み、諸侯や賓客との接見や政務を処理し、一方「成周」には大臣・百官が住み事務処理を行った。兵士は「成周」に常駐していた。秦による六国統一の後には三川郡が置かれた。洛陽は「秦隴の襟喉」と呼ばれて、東方への軍事上の重要拠点とされ、文信侯呂不韋や河南王申陽の封邑となった。前漢の劉邦は、紀元前 202 年西楚霸王項羽を垓下に倒して天下を統一、帝位についた後数ヶ月ここを都としたが、張良ほかの意見をいれて、関中の地に移り長安を建設した。前漢は三川郡を河南郡に改め、王城つまり雒邑を河南県、成周を雒陽県の治所とし、そして雒邑には「河南県城」を置いた。[註 13]

● 前漢・河南県城

図 5 の如く、洛陽市内の澗河の東岸で、前漢中期に荒廃していた「東周王城」の廢墟の中央部に建設された、規模の小さい新しい城で、城周の長さは約 5400m で、東西南北の各城牆は約 1400m で、城址の平面形は正方形に近い。後漢が周の「成周」の地に王都を築いて後、次第に廢れた。1955 年の比較的大規模な発掘によれば、県城の中央部は前漢期の遺構が主で、東部は後漢期の遺構を主としていた。[註 5]

● 漢魏・洛陽古城

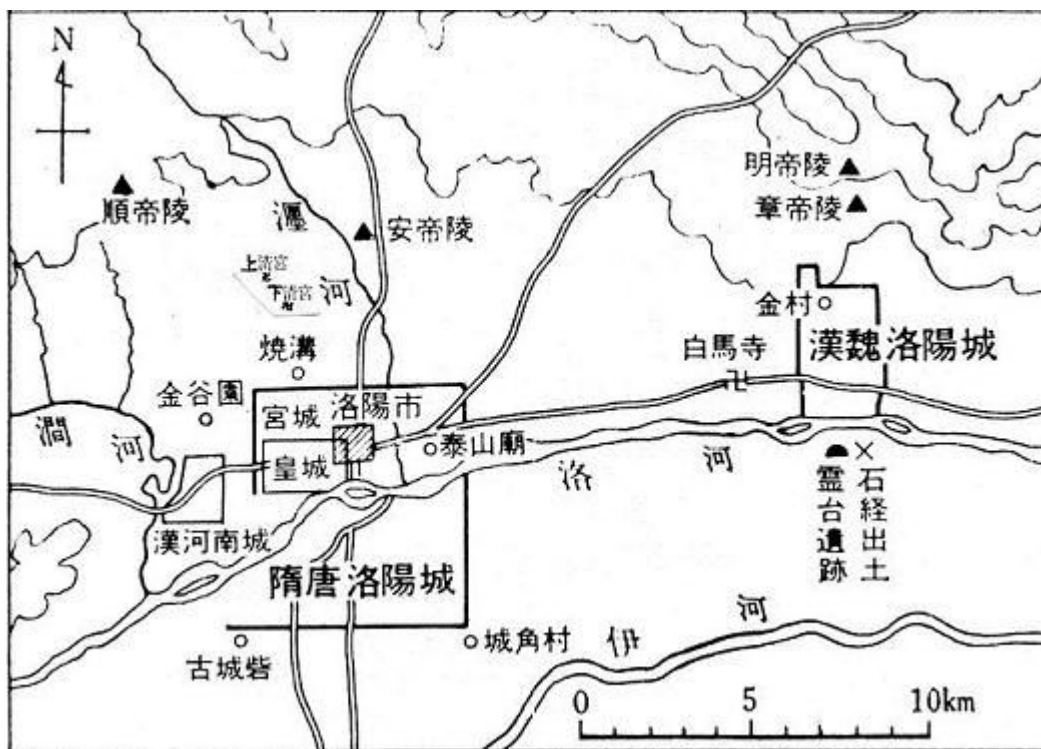


図6 洛陽付近図

中国の歴史より (一部加筆)

王莽の“新”は洛邑を東都とした。

後漢の雒陽城は現在の洛陽市から東に15kmにある、周代「成周城」の址の上に築かれた。『後漢書』によると、漢王朝を再興した光武帝劉秀は建武元年（紀元25年）に雒陽を都と定めて重修した。後漢196年間の後、曹魏46年間、西晋52年間、北魏42年間の都となった。いま「漢魏洛陽古城」と呼ばれている。魏以後、雒陽は洛陽と改められた。

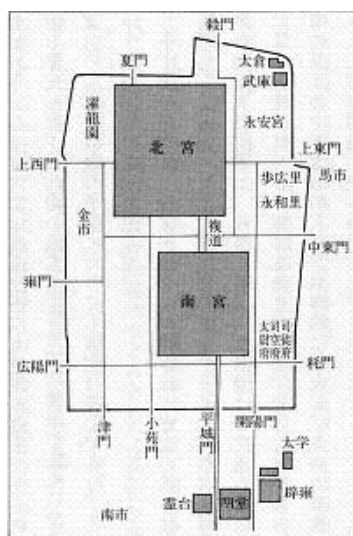


図7 後漢雒陽城

中国の歴史より

1962年以来、試掘や本格的発掘が続けられている。都城址は南北方向の長方形で実測によれば、西壁は残長4290m、幅20m。北壁は全長約3700m、幅25~30m、東壁は残長3895m、幅14m。南壁は洛河が北へ移動したために押し流されているが、東西両壁の間隔から推測すると2460m程度であったと考えられる。従って城壁の周長は、約14kmとなる。〔註10〕

光武帝が西暦25年雒陽を都に定めて重修した頃の城内には南宮・北宮があった。南宮は執務の場である皇城で、宮殿楼が底を並べ、南面中央には朱雀門が宏偉な姿を見せていた。北宮は皇帝の起居する宮城であった。

城外南郊には 29 年、最高学府である太学が設けられ、城西には最初の仏寺である白馬寺が建立された。190 年の董卓による雒陽焼き払いで徹底的な破壊を受けたが、三国時代に魏が再建、「乱世の奸雄」と評された曹操は、220 年ここで死んでいる。魏明帝曹叡の時洛陽城の西北隅、今の洛陽市翟泉村の東に位置する所に「金墉城」が増築されたとされるが、調査の結果金墉城は、三つの小城が丁度「目」の字形に並ぶ構造であり、しかも三城は門道によって通じていた。金墉城全体の規模は、南北 1018m、東西 255m で、城壁の幅は 12~13m であった。城門は合わせて八門が設けられ、各門の通路は一本のみであった。金墉城は、北に邙山をひかえ、周辺で最も高い地勢をしめ、洛陽全体を俯瞰する事が出来た、実質的には軍事要塞であったと言えよう。のち北宮・南宮をまとめて宮城とし、中央の宮門から南へ幅 42m の銅駝街を通し、その両側に官衙を設けて都城は整備された。司馬氏の西晋はそれを引き継いだ。乱世期の産物であるこの鉄壁の城は、その後魏晋期を通じて、曹芳、元帝曹奂、司馬衷、さらに晋の武帝楊皇后と恵帝賈皇后など、貴人を幽閉する獄舎となった。北魏の孝文帝が洛陽遷都を宣言(493 年)し、まず経営したのがここであった。唐の初期には洛陽県の県城として用いられたが、貞観元年(627 年)に県城が移って「金墉城」は廃棄された。[註 4]

倭国の朝貢使節は、後漢への倭奴国王の遣い(57 年)も、曹魏への女王卑弥呼の遣い(238 年)もここを訪れて朝貢した。1961 年全国重点文物保护单位に指定されている。

四世紀に入って西晋が滅び、五胡の時代になると、また略奪破壊されたが、493 年に北魏孝文帝が平城(いまの大同市)から洛陽に南遷して重修した。隋代には軍事基地となり、唐初には県治が置かれていたが、昔日の面影はなかった。[註 4]、[註 10]

● 隋唐・東都故城(隋唐洛陽城)

大業元年(605 年)三月から隋の煬帝が建設した「隋洛陽城」は、周の「王城」の跡地で首都・東京の建設と言う号令によって、毎月 200 万人という人員を動員して、翌年にはほぼ完成した。今の洛陽市の位置にあたる。同時に江南への運河・通済渠を開削し、黄河・洛河を繋いで全国からの物資を洛陽城に運び込んだ。唐は隋都を引き継いで東都とした為、「隋唐東都故城」と呼ばれている。規模壮大、壮観で、西都長安とともに当時の世界的な大都市であったが、洛陽城は長安城より小規模で、設計プランも明確に異なっていた。城址には、宮城、皇城、外郭城に加え、円壁城、曜儀城、東城、含嘉倉城などがあつた。「洛陽城」は、洛河の南北にまたがり、北は邙山から南は伊闕(龍門石窟がある山)に至る地域に建てられ、地形と防備上の理由で宮城・皇城地区は洛河北岸の西北隅に位置している。外郭城は、ほぼ正方形で、南から北に向かってやや細くなっている。東壁は長さ 7312m、南壁は 7290m、北壁は 6138m、屈曲した西壁は 6776m、城壁基底部の幅は 15~20m であった。郭城全体の西北隅に位置する宮城と皇城は、互いに南北に隣接していた。宮城は長方形を呈し、周囲を廻る版築城壁の壁面はレンガで保護されていた。

城壁の長さは、北壁 1400m、西壁 1270m、南壁 1710m、東壁 1275m、基底部の幅は 15～16m であった。皇城は、宮城の東、西、南の三面を取り囲み、皇城の東西両壁と宮城の東西両壁との間が、所謂「夾城（両側を壁ではさんだ皇帝専用通路）」となっていた。運河を通じて全土から運ばれてくる様々な物資、特に膨大な量の穀物を貯蔵する為に城内に「含嘉倉」が設けられた。「含嘉倉」は洛陽市老城区の西北、隴海鉄道に跨っている。隋唐時代の食糧地下貯蔵庫で、周りを城壁で囲まれていたため「含嘉倉城」とも呼ばれる。1969年と1971年に行われた考古学発掘調査により、東西 612m、南北 710m、総面積は約 43 万㎡、城壁・道路・倉窖と管理区とから成っていたことが分かった。隋唐以後の洛陽は西方に移ったため廃れて、いま城壁以外は何もなく、城内は見渡す限りの麦畑（夏はとうもろこし畑）である。五代の後梁 14 年・後唐 13 年、後晋 2 年の都城ともなった後、北宋時代は開封（東京）に都が移り、西京と呼ばれた。金は中京として金昌尉を設け、老城一帯を重修、明は河南府を、清も府治を置いた。国民政府も 1932 年 3 月、一時的に南京から洛陽に避難したが、11 月には南京に戻った。[註 4]、[註 10]

● 邙山・北邙

邙山は洛陽の北、黄河の南に東西方向に長さ 190 km に及ぶ黄土丘陵で、最も高い所で海拔 250m。この長く穏やかな丘陵は、洛陽を黄河の水患から守ると同時に、北からの外敵に対する自然の防御帯になってきた。それとともに、厚い黄土層は墓陵を建てるにも最適で、また風水学からみても、大黄河を後ろにし、中岳嵩山を遠望し、眼下に洛河・伊河・澗河・瀍河と言う四本の川が帯のように洛陽城を纏うのが見渡せるという最良の地であった。そう言った理由で邙山台地の上は、皇帝から庶民にいたる全ての人にとって、良き永眠の地とされてきた。詩にも「生きては蘇杭、死しては北邙」と詠まれている。特に、洛陽に都をおいた歴代王朝の皇族、大臣たちの墓はほとんどこの上に造られ、今でも陵墓群が台地を埋め残っている。唐の詩人、王建はこの累々と並ぶ墳墓の情景を「邙山山頭、閑土少なし。尽くこれ洛陽人の旧墓」とうたった。洛陽に都を定めた後漢、曹魏、西晋、北魏などの皇帝陵が知られ、特に後漢明帝、章帝、和帝の陵は南北に並ぶ「三漢陵」と言われて、洛孟公路（洛陽～孟津）と開洛高速道路（開封～洛陽）との交差点の近くにあるため良く知られている。さらに邙山は耕地としての適性も示しており白居易に「臥牛の地すら無し」の句があるほどの沢山の墓地は、しばしば耕されて肥沃な農地となった。[註 4]

● 上清宮 (じょうせいきゅう)

洛陽駅から北へ2 km、洛陽の町を一望することが出来る邙山で最も高い翠雲峰にある。翠雲峰は海拔250m、唐代には青々と茂る樹木に覆われて、風光明媚な避暑地だった。相伝によればこの地は老子李耳が仙丹を練った所と言う。李耳は東周の柱下史をつとめ、道教の教典になった『道德経』を残した。特に後漢末から魏晋期に老荘思想が盛んになり、老子の神格化がなされて、老君あるいは太上老君と呼ばれた。老子の姓が同じ李だったことから、唐の高祖李淵に尊崇され、太宗李世民は貞観十一年(637)に「柱下を帝室の先系となす」との令を下して同姓である唐王室の始祖とした。乾封元年(666)には、高宗により「太上玄元皇帝」を追奉された。開元二十九年(741)、玄宗の勅命で老子をまつる「玄元皇帝廟」が建てられた。その後、玄宗の「玄」を諱することで太微宮、老君廟、上清宮などとされた。この道教の聖地には、歴代の文人墨客の姿が絶えなかったと言う。[註4]

以上、洛陽の地の概略の歴史をたどってみた。

この後、(その1-2)として洛陽焼溝漢墓発掘報告書の概要を翻訳し墓の実態を把握したい。

出典・参考文献

- | | | | | |
|-------|----------------|----------------|----------------|------|
| [註1] | 洛陽焼溝漢墓 報告書 | 中国科学院考古研究所 | 中国科学院印刷廠 | 1959 |
| [註2] | 広州漢墓 報告書 | 中国社会科学院考古研究所 | 文物出版社 | 1981 |
| [註3] | 夏王朝は幻ではなかった | 岳南 訳朱建榮・加藤優子 | 柏書房 | 2005 |
| [註4] | 洛陽発[中原歴史文物]案内 | 堀内正範 | 新評社 | 1998 |
| [註5] | 新中国の考古学 | 中国社会科学院考古研究所編著 | 平凡社 | 1988 |
| [註7] | 最新実用中国地図冊 | 成都地図出版社編 | 成都地図出版社 | 1998 |
| [註10] | 中国考古の重要発見 | 黄石林 訳高木智見 | 日本エディタースクール出版社 | 2003 |
| [註11] | 中国史 | 尾形勇・岸本美緒ほか | 山川出版社 | 1998 |
| [註12] | 中国の考古学 | 小澤正人ほか | 同成社 | 1999 |
| [註13] | アジア歴史事典 | | 平凡社 | 1962 |
| [註15] | 中国歴史文化事典 | 孟慶遠ほか | 新潮社 | 1998 |
| [註16] | 史記 | 世界文学大系 | 筑摩書房 | 1962 |
| [註24] | 中国古代の城郭都市と地域支配 | 五井直弘 | 名著刊行会 | 2002 |